

道迷い遭難と登山地図アプリの関係

登山地図アプリが普及しても、道迷い遭難は目に見えて減っていない。そこにはどんな要因が隠れているのか。

河合芳尚（豊川山岳会）

減る登山人口、増える山岳遭難

公益財団法人日本生産性本部が発行している『レジャー白書』によると、日本の登山人口は2009年の約1230万人をピークに減少を続け、2023年には約480万人にまで減った。ところが警察庁発表の「令和5年における山岳遭難の概況等」によると、山岳遭難の全体人数は約750人だった平成2（1990）年ごろを境に右肩上がりに増加し、令和5（2023）年には過去最高の3568人を記録している。

山岳遭難が増加している要因の一つには、携帯電話の普及や電波状況の向上によって、山中で容易に救助を呼べるようになったことが考えられる。実際、

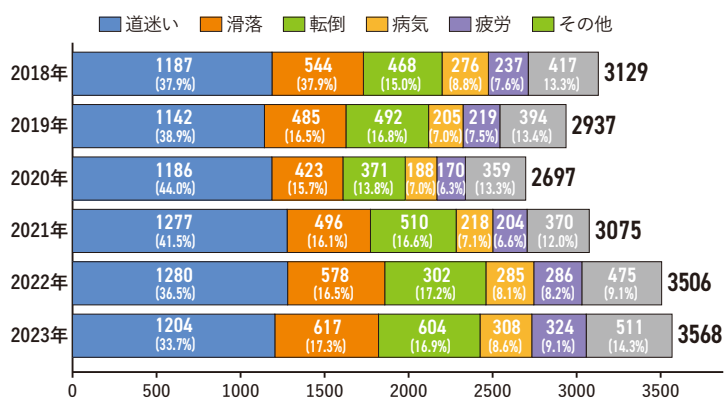
山岳遭難の増加は、1990年代後半に爆発的に増加した携帯電話の使用と相関を示している。携帯電話のおかげで重大化しなかった遭難事例がある一方、自力で下山できるはずの状況で安易に救助を呼んだ事例も数多く存在しているというのだ。

アプリは道迷い防止に効果あり？

さて、今回テーマとする「道迷い」遭難者の推移を見てみよう。山岳遭難者全体の増加に合わせて平成30（2018）年の1187人まで増加傾向を見せていたが、それ以降はほぼ横ばいの状態が続き、令和5（2023）年には1204人となっている。構成比で見ると、「道迷い」遭難者数は令和2年の44・0%をピークに減少傾向を示し、

態様別山岳遭難者（2018～2023年）

出典◎警察庁「令和5年における山岳遭難の概況等」



令和5年は33・7%に低下した（グラフ参照）。こうした「登山人口は減少」「遭難者数は増加」「道迷い遭難者数は横ばい・比率は減少」といったデータから考えられるの

は、2010年代後半から利用者が急激に増加した各種登山地図アプリのGPS・ナビゲーション機能が道迷い遭難の防止に役立っていることを示唆している。アプリを開けばすぐに現在位置が分かり、方角や進行方向が分かれば道迷いをしてもらいカバリーが簡単にできる。どの登山地図アプリがよいかはさておき、道迷い防止に登山地図アプリの使用は確実に有効で、素晴らしいツールだろう。

アプリに頼りすぎる危険性

だが、登山地図アプリの活用が良いことばかりだとも断言できない。これほどアプリが普及して

いるのに、全体の遭難者数は増加傾向にあることから、登山地図アプリの記録投稿・共有機能が、無計画・実力不足の登山者を増やし、そのうちの少なからぬ数が遭難事例を起こしたり、安易な救助要請（遭難事例化）をしている可能性がある。

現在アプリを使用する多くの人が、他人の活動記録を参考に登山計画を立てているが、それらはあくまで個人の記録であり、投稿者と自分とは体力も経験値も違う。同じペースで歩けずに行動時間が長くなり、日帰りのつもりが途中でビバークしたり、記録では難なく通過していた岩場が自分にとっては危険を伴う場所であったりすることが多々ある。

また、登山地図アプリやスマートフォンに頼りきってしまい、歩くルートを事前に地図で確認しなかったり、紙地図を持たなかったり、はてまたまったく地図が読めないのに山に入ったりするの、道迷いほかさまざまな山岳遭難につながる要因となる。

あまり地図が読めないのなら、

もしものときは登山地図アプリとスマートフォンが命綱となるから、バッテリー切れで現在地がわからなくなるのだけは避けたい。バッテリーの予備は必須だろう。細かい話だが、予備バッテリーは持ったがケーブルを忘れ、充電できずに遭難した事例もある。また、落として故障紛失しないよう、携行方法にも工夫したい。

そのほか、事前に地図データをダウンロードしておき、電波の届かない場所でも表示できるようにするのも忘れずに。電波を探すのにバッテリーを消費するため、「機内モード」に設定しておくことも大切だ。なお、一部のアプリには登山者の現在位置を家族等に随時知らせる機能があるが、これは機内モードでは利用できないので注意したい。

道迷い時の心理と心得

道に迷ったときによくある心理が、「あれっ？ おかしい？」と思っても、「何とかなる」とそのまま進んでしまうものだ。「道迷いの心理」は初期の段階ではとてもポジティブな場合が多い。



登山地図アプリを積極的に使用するなら、落とすにくい仕様の防水ケースに入れ、予備バッテリーの携行を

とりあえず赤テープなどを目印に進んでしまう場合は始末が悪く、「がんばれ！あと少しで登山道に出る」と目標ができてしまい、道迷いの解決方法が「がんばって進む」という内容にすり替わり、不安やあせりを打ち消すためにひたすら進んで、なおのこと冷静さを失ってしまう。結果、途中で赤テープがなくなったり、藪で進めなくなったりして、取り返しのでない迷い方をしてしまう。

このような「がんばれ！」と自分を励ましている場合は、根拠なく行動している場合が多い。「そのまま進む」という感情を修正しにくく、地図を見て現在地を特定しようとせず、「どうにかなる」という願望のみで行動してしまう。

また、道迷い遭難事例の多くが、どういうわけか最終的に沢に迷い込み、滝や崖が出てきて行き詰まりようやく行動を止めている。気づいたときには登り返すことができなくなっていたり、滑落して動けなくなったりするケースもある。道迷いで遭難した人は「なぜあそこでそのまま進んでしまったのか分からない」と言う。「根拠なく進む」。これが道迷いの最大の要因だろう。

道迷い遭難を防止するために登山地図アプリを利用することは有効だが、それだけではいけない。山に行くためには地図を読む能力、すなわち「根拠を持って進む」力を身につけないといけない。そして、道に迷ったときこそ冷静さが必要だ。

読図をする上で一番難しいことは「あたり前のこと」を「あたり前のようにやる」ことだ。地図を見てルートを「先読み」する。次に特徴物と地形を確認しながら「ルートを維持」する。その上で登山地図アプリで現在地確認を行えば、道迷い遭難のリスクは大きく減らせるだろう。